

教師による授業認知と省察に関する研究

A study of teachers' recognition and their reflection in teaching

中村 駿 (Shun Nakamura) 指導：浅田 匡

1. はじめに

1.1. 問題と目的

Schön (1983) の省察研究が広がる一方で、省察概念の混乱や行為過程における省察研究の不足が問題とされている。本研究は、行為過程における小学校教師の省察過程を対象に、教師が授業改善をするための思考過程を探究することを主たる目的とする。具体的には、行為の中の省察 (reflection-in-action) に注目し、さらに教師の授業認知を手がかりにして、教師の省察過程を探求する。

1.2. 省察に関する諸概念の定義

省察に関する諸概念に関して、本研究では先行研究に基づき、授業認知を「授業過程の中である知覚情報が入力された時に、その現象を理解したり、ある状況である (決定的状況) としてフレーミングしたりする過程」、行為の中の省察を「直面する現象を理解できないような未決定状況によって生じ、行為過程の中で行為しながら考えることによって自身の枠組みを再構成しようとする過程」、行為についての省察を「授業認知や行為の中の省察による直接的経験を対象化して、その経験を理解したり説明したりすることを通して、授業改善を思考する過程」と定義した上で分析を行う。

2. 研究 I

2.1. 目的と方法

研究 I では、教師による授業認知とそれを規定する属性要因との関係から、授業認知の特徴を明らかにすることを目的とする。

本研究では 1 時間の授業動画を 100 枚の写真スライドにしたものを提示して、小学校教師 31 名を対象に認知内容を調査した。授業認知の属性要因として、教職経験年数、教材教授経験、性別、専門教科について尋ねた。

2.2. 結果と考察

本研究では「教職経験年数」が授業認知を規定する要因となることが示唆された。教職経験年数に応じて初任者教師 (0~2 年, n=9)、若手教師 (3 年~8 年, n=11)、中堅・経験教師 (9 年以上, n=11) の 3 群で比較した結果、第 1 に、若手教師以上になると授業事象の認知数が増えること、第 2 に、教職経験年数が高い群ほど理解できる事象が多いこと、第 3 に、教職経験年数が高い群ほど児童全体

の様子や個人差を以前の状況と関連付けながら認知すること、が授業認知の特徴として示唆された。

3. 研究 II

3.1. 目的と方法

研究 II では、実際の授業における教師の授業認知と省察過程より、教師の授業改善における思考過程を明らかにすることを目的とする。

本研究では、授業過程における経験教師 (退職校長) の授業認知を基に授業者にインタビューを行い、教師の授業認知や省察過程を調査した。埼玉県の小学校教師 3 名 (教師 Y は初任者教師, 教師 T, 教師 O は中堅教師) が授業を行い、経験教師 (教師 K) がそれぞれの授業に参観し、認知内容を ICレコーダーにコメントした。

3.2. 結果と考察

授業者と参観者、および授業者間のインタビューデータを比較したところ、第 1 に、研究 I と同様、教職経験年数の高い教師ほど理解できる事象 (決定的状況) が多いこと、第 2 に、どの教師も共通して行為過程の授業認知や行為の中の省察といった直接的経験を基に、授業改善 (行為についての省察) を行っていること、第 3 に、授業改善の内容は行為過程における状況のフレーミングの仕方によって規定されていることの 3 点が示唆された。

4. 総合考察

本結果より、教師が授業改善をするための思考過程として、第 1 に、行為の中の省察を引き起こす未決定状況の数は教職経験年数によって規定されること、第 2 に、教師は直接的経験で行った状況のフレーミングに基づき授業改善を行っていること、第 3 に、研究 I を考慮すると、そのフレーミングの仕方は教職経験年数に応じて変わることが考えられる。

5. 今後の課題

研究 I では授業認知の内容から教師を分類する方法についても検討すること、研究 II では縦断的な授業改善プロセスについて探求することを課題としていきたい。

参考文献

Schön, D. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.